

残された言葉をたどる 駒田晶子

戦後七十年目の夏がおわった。特集を組んだ月刊誌について考えたことを。

「歌壇」八月号は「戦後七十年、被爆と被曝を考える」。〈被爆〉は一九四五年八月に広島と長崎に投下された原子爆弾を、〈被曝〉は二〇一一年三月、東日本大震災による福島原子力発電所での事故を。ふたつの文字をしばらく眺めていた。吉川宏志氏の総論、正田篠枝歌集『さんげ』、竹山広歌集『とこしへの川』、佐藤祐偵歌集『青白き光』を何度も読みこもうとする姿勢、広島・長崎・福島に関わりのある歌人の文章は、読者に重く手渡されたことだろう。『とこしへの川』を読んだ大石直孝氏の「私はいつか、爆弾の尾翼にサインするかもしれない。(段落替え) 竹山の歌に、原爆を落とした者を非難する姿勢が見られないのは、もしかすると竹山の中にも、そうした一人ひとりの人間の生のあり方、限界

ある人間のあり方への認識があったのかもしれない。」の文章に立ちどまった。

この〈個〉の認識こそが、必要なのだ。圧倒的に非力である〈個〉としての存在を読者に示せるかどうか、表現として迫れるか、に架かるのだろう。

「短歌研究」八月号は「戦後七十年をふりかえる」。巻末付録は復刻「短歌研究」昭和20年9月号。十五の項目の論に、それぞれ読み応えがあった。篠弘氏の「戦後の短歌をふり返る企画は、いくたびくりかえされてもよい。」の言葉が心にのこる。

三枝昂之氏の「短歌研究」戦後復刻号に掲載された佐佐木信綱の作品は一字空けなのか、占領軍による検閲を避けるための自主規制により消された文字であるのかの考証は、出版という営為が自由に行えなかった時代を実感できるものだった。

「心の花」八月号は「戦後70年に考える」。

タイトルの助詞〈に〉に、おっ!となった。

時間の層を思う姿勢も大切だけれど、〈個〉が立つ一点から見えるものがあるかもしれない。七十年という時間は、短いようで、やはり、長い。

身を削るようになって作り、残された作品を読みながら、つないでいくために何ができるのか、を問う。